



あとがき

木下, 資一

(Citation)

近代, 108

(Issue Date)

2013-03

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005483>



あとがき

近年は、論文が査読付雑誌に掲載されるか否かが問われるようになりました。三十年前ほどは、少なくとも私の関わっている専門分野では、査読の有無にはそれほど頓着しませんでした。査読があろうと無かろうと、粗末な論文を書けば大恥をかくことになりました。著者自身にそのような自主規制が働くので、自信がないものは発表しなかつた。

しかし、いつの間にか論文生産の数がまず評価対象になり、それに伴って自主規制がどこかに消えたのかもしれない。また大学院の増加に伴い、論文を客観視することが難しい研究者が増えたのでしょうか。グローバル化と共に理系の流儀が規準となり、学界的権威を持つ研究者の査読を求めようになったのは、時代の要求かもしれません。しかしながらその査読を受けたはずの論文にも、瞬く間に生命を失うものは少なくありません。そのような時代において、本誌同人は高い志とモラルを維持しつつ、長い学問的生命を持つ、質の高い論文や貴重な資料、価値ある翻訳などを、数多く投稿してくれています。拙稿もその驥尾に付して、投稿させていただいています。ありがたいことです。大学教員にとって、春は別れの季節でもあります。今年も同人では三人の先生が定年や転任でキャンパスを去られます。今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

青草に寝ころべば青空がある 山頭火

三月二十二日記

編集担当 木下資一